

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

赤い闇 スターリンの冷たい大地で

2019年/ポーランド・ウクライナ・イギリス映画
配給：ハピネット/118分

2020 (令和2) 年8月18日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

監督：アグニェシュカ・ホランド

原案・脚本：アンドレア・チャルー

パ

出演：ジェームズ・ノートン/ヴァ

ネッサ・カービー/ピータ

ー・サースガード/ジョゼ

フ・マウル

👁️👁️ みどころ

勇気ある新聞記者が懸命に取材し、発見した事実を報道する姿には感銘を受けるが、その手の映画はハリウッドに多い。しかし、ポーランド人監督アグニェシュカ・ホランドは、若き英国人記者ガレス・ジョーンズが1933年に告発したスターリン政権下のソ連で起きた衝撃の実話を映画化！

世界中に恐慌の嵐が吹き荒れているのに、なぜソ連だけが経済的な繁栄を謳歌しているの？そんな疑問を持ったジョーンズが単身ウクライナに乗り込み、取材してみると・・・？

ジョージ・オーウェルの『動物農場』は皮肉いっぱい面白い寓話だが、ジョーンズが目にしたものはすべて真実。これは必ず記事に！そう願うジョーンズだが、その前に立ちほだかった障害は？

中国の王兵（ワン・ビン）監督の『無言歌』（10年）もしんどかったが、本作もしんどい。しかし、こんな映画から何が真実で何がフェイクかを見分ける能力を身に着ける努力をしなくちゃ！こりゃ必見！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■誰がこんな骨太の問題作を？監督は？原案は？脚本は？■□■

自由と人権の国アメリカでは、「闘う新聞記者」を主人公にした映画である①『スポットライト 世紀のスcoop』（15年）（『シネマ38』48頁）、②『ペンタゴン・ペーパーズ/最高機密文書』（17年）（『シネマ41』37頁）、③『記者たち 衝撃と畏怖の真実』（17年）（『シネマ45』12頁）、④『大統領の陰謀』（76年）等が実によく似合う。それに対して、日本では『新聞記者』（19年）（『シネマ45』24頁）のような、「闘う新聞記者」を主人公にした鋭い問題提起作は少ない。

目を転じると、ポーランドにはアンジェイ・ワイダ監督という巨匠がいるが、本作を監

督したアグニェシュカ・ホランドは、ワイダ監督のアシスタントとしてキャリアをスタートさせた女性監督だ。1948年にポーランドのワルシャワで生まれた彼女の代表作は、何と言っても『ソハの地下水道』(11年)、『シネマ 29』141頁)。これは、ワイダ監督の薫陶を受けたホランド監督にしか作れない傑作だった。そんな彼女が、実在の記者ガレス・ジョーンズの真実の物語に基づいて監督した骨太作が本作だ。

本作の原案と脚本を書いたニューヨークに拠点を置く作家アンドレア・チャルーパは、ホランド監督のそれまでの映画や政治的発言から「この脚本の監督にはホランドが最適だ」と考えたらしい。チャルーパは、ウクライナにおけるホロドモールを生き延びた祖父にインスピレーションを得て原案と脚本を書いたが、ホランド監督は、そんなチャルーパの脚本がジョージ・オーウェルの『動物農場』と結びつくコンセプトに惹きつけられたそうだ。そんな縁でこの2人が結びついた結果、日本人にはいささか難解なものの、こんな骨太の問題提起作が誕生することに。

■織田信長は「人間五十年」、ジョーンズは「人間三十年」■

幸若舞「敦盛」の「人間五十年」を愛した織田信長は、ホントに50歳直前に明智光秀の謀反によって死んでしまったが、本作の主人公となる若き秀才記者ガレス・ジョーンズ(ジェームズ・ノートン)は、1935年の30歳の誕生日直前に、何者かによって殺害されてしまった。

本作のテーマは、世界中に恐慌の嵐が吹き荒れる中、なぜスターリンが統治するソビエト連邦だけが繁栄しているの?という謎を解くために、ジョーンズが1933年に敢行したソ連のウクライナへの取材旅行だが、本作ラストには、何とジョーンズが日本にも滞在し、満州国について調べ、主要人物へのインタビューを試みたことが字幕で解説されるから、ビックリ。また、本作のパンフレットには、「Gareth Jones 1930-1935」があり、25歳から30歳直前までの若き秀才記者ジョーンズの、何とも濃密な5年間の活動が要約されている。織田信長も1560年の「桶狭間の戦い」から尾張の統一を経て、本能寺で無念の死を遂げるまで、12年間にわたって怒涛の如き人生を走り抜けたが、ジョーンズの場合、信長よりもさらに短く、たった5年間だけだ。ジョーンズはなぜヒトラーへのインタビューができたの?また、若くしてなぜ元英国首相ロイド・ジョージの外交顧問に就任できたの?さらに、その職を解かれたのに、ジョーンズはなぜフリーランスの記者として、ソ連のモスクワやウクライナに取材に赴くことができたの?

パンフレットには、SYO(映画ライター)の「闇の中で貫かれた、『真実を伝える者』の信念」があるが、本作のスクリーンも闇の中のように一貫して暗く、また、一貫して重々しい。本作の紅一点とも言べき美女エイダ・ブルックス(ヴァネッサ・カービー)が登場し、ジョーンズと絡むシーンだけは少し華やか(?)だが、「これは何の肉?」と聞くゾッとするようなシーンを含めて、すべてが暗く、しんどい映像ばかりだ。そんな映画に2時間付き合うのはしんどいが、本作は必見。そして、このジョーンズという男の生きざま

も必見！

■□■友人記者は死亡！だが支局長はピューリッツァー賞！■□■

世界を股にかけて取材して回る新聞記者はカッコいいが、同時に危険と隣り合わせ。しかし、ソ連行きを決意したジョーンズが頼ったニューヨーク・タイムズのモスクワ支局長であるウォルター・デュランティ（ピーター・サースガード）は、ピューリッツァー賞を受賞した大物だから、ソ連やウクライナ、そしてスターリンの取材旅行に危険などないはず。ジョーンズはそれほど楽観していたわけではないが、ヒトラーへのインタビューさえできた俺だから、スターリンへのインタビューだって！とジョーンズが少し甘く考えていたことは間違いない。そんな中、デュランティから冷ややかにあしらわれたうえ、モスクワに立つ前に国際電話で連絡を取った友人の記者ポール・クレブが強盗に殺されたと聞くと唾然。

そこで、デュランティの下で働いていた女性エイダに探りを入れると、ジョーンズと同じようにソ連繁栄の秘密を取材していたクレブは、情報統制を行う政府に煙たがられていたことを明かしてくれたから、事態はかなりヤバイ。ジョーンズとエイダの2人はすぐにいい仲になっていたが、それでも当局から日常的に監視されているエイダの口は重い。しかし、ジャーナリストとしての使命感に駆られて、真実を追い求めるジョーンズのひたむきさに心を動かされた彼女の口から、「ウクライナ」という謎めいたキーワードを聞くことができたジョーンズは勇気百倍だ。

ここでラッキーだったのは、元英語教師だった母親が、かつてウクライナのスターリンで暮らしていたという縁があったこと。もちろん、秀才のジョーンズはロシア語もペラペラだ。心配するエイダに別れを告げたジョーンズが、リュック一つでウクライナ行きの汽車に乗り込んだところから、本作後半の本格的ストーリーが始まっていくが、ジョーンズの傍らには監視者らしき初老のロシア人が付きっきりだ。この男は汽車の中で豪華な食事をジョーンズに提供していたが、その目を盗んで別の貨物列車に乗り換えると、そこで目にした風景は？この初老のロシア人もスターリンが統治するソ連の繁栄ぶりをしきりに語っていたし、デュランティもスターリンの業績をたたえる記事をニューヨーク・タイムズに書いていた。しかし、今ジョーンズが貨物列車の中で目にした現実は何？

■□■記者ジョーンズと作家オーウェルの「対話」に注目！■□■

1967年4月に大阪大学法学部に入學してすぐ学生運動に飛び込んだ私は、当然のようにマルクス、エンゲルス、レーニン基礎文獻を一生懸命勉強した。そこで学んだ、1917年から18年のロシア革命に至るまでの、ドイツやロシアの動乱ぶりは面白かったが、同時に、レーニン、トロツキー、ローザ・ルクセンブルグ等の個人のキャラクターにも惹きつけられた。

本作には、『1984』の著者として有名な作家ジョージ・オーウェル（ジョゼフ・マウル）が登場する。オーウェルが1943年から44年に書き、1945年8月に出版した

メチャ面白い寓話である『動物農場』は、①スターリンをモデルにした雄豚のナポレオン、②トロツキーをモデルにした同じく雄豚のスノーボール、③レーニンをモデルにした老いた雄豚のメジャー爺さん等が登場する。1935年に死亡した（殺された）ジョーンズは、この『動物農場』を読んでいないが、スクリーン上に登場する記者ジョーンズと作家オーウェルとの対話シーンを見ていると、何事もまっすぐに直視するタイプのジョーンズと、何事も皮肉っぽく物事を評論するタイプ(?)のオーウェルの対比が興味深い。これらはチャーリーパの脚本をホランド監督がうまく演出したものだから、本作ではそれをしっかり注目したい。

■□■ 飢餓の噂は？その実態は？そんな記事を書けるの？ ■□■

戦前から戦後にかけて活躍した内田吐夢監督の代表作は『宮本武蔵』全5部作(61年～65年)だが、私が強く印象に残っているのは『飢餓海峡』(65年)。これは、そのタイトルとされている「飢餓」とは全く関係のない、水上勉原作の骨太の犯罪映画だが、ジョーンズがウクライナに入った直後からは、ウクライナの飢餓の実態がこれでもかこれでもかとスクリーン上に映し出されていくので、それに注目！

「飢餓」に関してなら、本作と同じような映画があった。すぐにそう気づいたのが、中国の王兵(ワン・ビン)監督の『無言歌』(10年)、『シネマ34』281頁)だ。同作でこれでもかこれでもかと描かれた、食べ物を探る人間模様を見ていると気分が悪くなってきたが、それは本作も同じだ。しかし、そんな思い以上に写真を撮ることに夢中になっていた敏腕記者であるジョーンズは、たちまち逮捕されてしまうことに。

「ウクライナは飢えている」。そんな噂が本当だったことを自分の目で確認し、その深刻さに衝撃を受けたジョーンズが、その実態を記事にしようとしたのは当然。しかし、当時ソ連から絶大な信頼を得ていたニューヨーク・タイムズのモスクワ支局長であるデュランティは、ジョーンズがそんな記事を書くことを絶対に許さない姿勢を示したから私はビックリ。これでは、デュランティが受賞したというピューリッツァー賞の信憑性がまったくなくなってしまうが、その実態は？

1933年3月に、ジョーンズがベルリンに戻ることができたのはソ連とデュランティによる“人質政策”の中に置かれたためだから、ベルリンに戻ってもジョーンズは身動きが取れないはず。私はそう思っていたが、スクリーン上では、3月29日に「飢餓」の事実を伝えるプレスリリースを発表し、New York Evening Post、The Manchester Guardianを含む米国、英国の新聞に掲載される姿が描かれていく。これに対して、すかさずデュランティは3月31日にニューヨーク・タイムズ上でジョーンズの記事を否定する記事を掲載したが、ジョーンズは5月13日に辛辣な反論記事を展開し、その後33年の6月頃までの間にフリーランスのジャーナリストとして英国、米国の様々な新聞にて飢饉に関する記事を発表し続けたから、すごい。しかし、そんなジョーンズの頑張りに対する報復は？

■□■穀倉地帯のウクライナで、なぜホロドモールが？■□■

私はパール・バックが中国を題材に描いた小説『大地』(31年)を小学生の時に夢中になって読んだが、そこでは、洪水による飢饉の実態が強く印象に残った。このようにたびたび洪水や飢饉に襲われる中国の都市と違い、ウクライナは豊かな穀倉地帯だから、東部のシベリア方面は寒く凍えていても、西部のウクライナは大丈夫。それが常識のはずだが、1932年から33年にかけて、ウクライナでは前代未聞の大規模な飢饉が発生したらしい。これが、今では「ホロドモール」(ウクライナ語で「飢餓による殺害」の意味)と呼ばれるものだ。当時のソ連政権はこれをひた隠しにし、国外では容易にその実態を知ることにはできなかったから、正確な統計的数字を出すことは不可能だが、研究者たちの推定によれば、死者(大部分は農民)の総数は300万人以上にのぼったうえ、人肉食も横行する、凄惨な状況だったようだ。

本作はテーマ自体が難解だから、バックグラウンドをしっかりと勉強する必要があるが、そこで重宝なのが、パンフレットにある沼野充義氏(名古屋外国語大学副学長 ロシア・ポーランド文学者)の『『赤い闇 スターリンの冷たい大地で』の歴史背景と現代的な意味』だ。そこでは、①ホロドモールとは何か?、②ジョーンズとデュランティ、③スターリンによる意図的な「ジェノサイド」だったのか?、④オーウェルから現代のロシア・ウクライナの対立まで、に分けて丁寧に解説されているので、これは必読!

■□■真の勝者はジョーンズ?それともデュランティ?■□■

本作は、ウクライナにおけるホロドモールを生き延びた祖父にインスピレーションを得たアンドレア・チャルーパーの原案・脚本に基づいて、ポーランド出身のアグニェシュカ・ホランドが監督した骨太の問題提起作だが、全編を通じてジョーンズの強引き(猪突猛進ぶり)が目につく。若く勢いがあるからこそそんな突出した行動がとれるわけだが、いかにも危なっかしく思えるのは私だけではないはずだ。ひょっとして、誰よりそんな心配をしたのはデュランティかもしれない。スクリーン上に見るニューヨーク・タイムズのモスクワ支局長デュランティの姿は、ソ連の庇護下に置かれていることもあっていかにも権力迎合型でいやらしく思えるが、よく考えれば、むしろこのほうが自然で、あるべき姿かもしれない。真実を取材し、追及し、それを記事にするためには、多少の妥協も必要だ。そんな言い方をすれば、その人間の言うことはすべて信用できないことになってしまうかもしれないが、それでも、その言葉の中に一定の真実が含まれている可能性がある。

スクリーン上に見るジョーンズとデュランティの議論で、デュランティはジョーンズに対して、「大義の前では、1人の人間の野望などかすむ。君はいい記者になれたのに」と語っていたが、あなたはこれをどう理解?ちなみに、オーウェルもジョーンズの志を理解したうえで、「正しい文脈で伝えねば・・・」と論じていた。さらに、ジョーンズの雇い主だった元英国首相ロイド・ジョージも、「英国の経済が破綻寸前の時に、勝手が過ぎる。君は一線を越えた」と激怒していたが、これらについても、あなたはどう読み解く?このよう

に考えると、真実の追及とその暴露（記事化）に命を燃やし、30歳で殺されてしまったジョーンズと、ソ連に迎合しながらもピューリッツァー賞を受賞したデュランティの、どちらを真の勝者と考えればいいのか？それはそれで難しい問題だ。

ちなみに、デュランティからジョーンズの記事は全くの偽りだという文書にサインを求められたエイダは、結局それを拒否したが、彼女はその後どうなったの？ひょっとして、彼女も抹殺？それらを含めて、ジョーンズの生きザマを中心に本作を鑑賞するについては、真の勝者はジョーンズ？それともデュランティ？それをしっかり突き詰めて考える必要がある。

2020（令和2）年8月21日記